



医療安全研修と 新型コロナウイルス感染症

京都府立医科大学麻酔科学教室教授
同附属病院副院長・医療安全管理部部長

佐和 貞治氏

毎年、梅雨が終わり、蒸し暑い夏の始まりを京都に告げるのは、コンチキチンの祇園囃子です。祇園祭は平安時代869年(貞觀11年)に全国で疫病が流行り、その折に現在の二条城南側の真言宗寺院「神泉苑」に当時の国の数66本の鉢を立てて災厄の除去を願ったのが始まりだそうです。「いくらコロナってゆうても祇園祭だけは、やめるわけにはいきまへん!」とは、そもそも祭りの目的が疫病退散で、令和元年には1,150周年を迎えた特別な祭りだからなのです。しかし、今年は新型コロナウイルス(COVID-19)感染症のせいで、山鉢建や山鉢巡行等の主要な行事が中止となりました。暑くなれば、「こんなウイルスはいつの間にか消えてしまうのでは」という楽観的な期待は見事に裏切られ、7月に入ってはまたもや患者急増の様相です。

各医療施設内の様々な会議は三密を避けるためにオンライン会議等が導入されてきたこと

でしょう。医療法の規定による職員への医療安全研修も、集合講義形式での開催は困難となりました。そもそも1,000名以上の職員を抱える私どものような施設では、限られた時間帯に多数の職員を集めての研修会は難しく、年に何回も研修の機会を作り、撮影したビデオで後日に研修を繰り返し、さらにレンタルビデオ閲覧で参加相当とするなどの工夫をされてきました。私どもの施設では働き方改革も視野に入れて、一年前からインターネットを通じたオンデマンドeラーニングとして医療安全研修会を準備してきましたが、COVID-19禍で一気に崖から飛び降りるように実施運用に至りました。実際にeラーニングを運用してみると、職員からは「自宅で子どもが眠ってからゆっくり学習」とか、「スマホで通勤時に学習可能」とか、ますますの評判が得られています。また、簡単な評価テストを組み込むことで、学習到達度評価が得られるメリットもあります。COVID-19禍が収まれば、集合形式の研修会も再開し、多様な様式で職員の医療安全に関する意識を高めていきたいところです。

現在、我々はCOVID-19に一方的にやられてしまっているように感じます。いつまでもやられっぱなしではどうしようもなく、今後は今まで当たり前であった縛りからときには大きく脱却し、仕組みを大胆に作り変えていく「反撃」が必要ではないでしょうか。1,151年目の祭りで町衆のエネルギーを疫病退散のため静かに結集させるかのように、この厳しい状況のなかでも医療安全について皆さんの英知を結集させて疫病退散していきましょう。

◇ 研究科長挨拶 ◇

私たちの社会は、超高齢社会となり、疾病や障害を抱え、他者のケアや支えがなければ生活できない高齢者が多くなり、それに伴い医療費や介護費が大幅に増大し、それらをいかに抑制し削減するかが国の課題となっています。さらにAIやロボット、科学技術の急速な発展によって医療業界は大きく変化しています。このような医療を取り巻く厳しい環境下で、医療組織(病院)が環境の変化に対応して存続発展するためには、高度の専門知識を持った医療従事者の育成が大きな課題となります。本研究科は、医療に関する専門知識や技能等を習得することにより、医療業界を担う人材の養成、特に医療安全を担う管理者やリーダー、あるいは看護部長や看護師長等のリーダーの養成を目的としています。

大学院における教育・研究の目的の一つは、学生の高い研究能力と創造的能力の育成にあります。研究するということは、新たな真実や事実を発見するということであり、新しい知識や技術を創造することです。それは現状への疑問、現在の制度や仕組みを絶えず疑問に思い問題とし、事象や現象を説明する従来の理論やモデルあるいは仮説に対する疑問から始まります。そして真理を探求して、新たな真実を見つけ、新たな知識を創造することです。そのためには、自己の研究領域を含めて幅広い領域に関する学習と新事実を発見し新しい知識を蓄積する学習が必要です。学習には従来の幅広い分野の知識や技術を習得する量的側面と、視野を広げ新しく有用な知識や技術を創造する質的側面があります。

本研究科は、医学系教員だけではなく、工学系、心理学系、経営学系、社会福祉系と多様な分野の教員が相互連携して教育研究に

取り組むことで、幅広い分野の専門知識を習得できる体系となっています。また学生に対しては主指導教員と副指導教員がそれぞれのニーズに対応したきめ細かい指導をすることで研究能力や創造的能力、問題解決能力や実践力の習得を図るようにしています。

医学の進歩は急速であり、医療の世界では習得した知識は直ぐに陳腐化します。生涯学習の必要性を認識し、常に問題意識を持ち、自ら問題を解決し、絶えず知識を創造する能力を高めたい方、科学的思考に必要な基本的知識や医療安全に関する高度な専門的知識を備え、医療業界で活躍できる管理者やリーダーを志向する方、自律的主体的に医療専門職としてのキャリア形成を考えている方は、本学でのキャリアアップに挑戦されることを期待しています。

医療管理学研究科 研究科長
狩俣 正雄博士(経営学)
大阪市立大学名誉教授
日本経営倫理学会理事(関西地区研究部会長)

新任教員紹介



上農 喜朗先生

私は1980年に大阪大学医学部を卒業し麻酔科学講座に入局しました。1983年から米国ユタ大学で物理化学的麻酔作用機序の研究に携わり、帰国後は臨床麻酔と手術部運営に携わりました。麻酔は手術を行うために、人の意識を取りさり、呼吸すらできない無防備な状態にする極めて特殊な医療行為です。事故が起これば数分で心停止や高度脳障害に陥る危険があります。シミュレーション環境は非常に稀であるが一度事故が起これば刻一刻と事態が進行し、破滅的な状況に陥る航空機や原子力発電所などの教育訓練に古くから用いられていました。麻酔管理もこれらに相当する医療行為です。シミュレーションをとおして医療従事者への医学教育・研究・安全管理に寄与することを目的として、2005年に日本医学シミュレーション学会を設立し、気道管理、周術期危機管理、エコーチュートリアル下中心静脈穿刺、処置時の鎮静鎮痛などの教育セミナーの開発・運営に携わってきました。



吉本 主一先生

私は、教育社会学を専門とし、特に大学・短大・専門学校等の第三段階教育を中心に、キャリアの形成と教育に関する実証的で政策科学的な教育研究を行ってきました。特に、インターンシップや専門実習など、学術と職業とを往還する職業統合的学習に注目し、学修成果の構築、コンピテンシーとキャリアの形成をめぐる今日的特質、教育と職業・社会との移行・接続について、調査・国際比較等を手がけてきました。また、学術的知見を文教政策形成の場に持ちこむことにも関わってきました。

いま、第三段階教育における学術的アプローチとキャリア教育・職業教育アプローチとの総合、教育の目的・方法・ガバナンスにかかる複眼的モデルを探求しています。特に本学において、医療安全を支える多様な専門職業人のキャリア形成とそれを方向づける指導者の育成について考えています。多様な専門を持つ教職員、学生、関係者の皆さんとの研究交流を楽しみにしております。



廣瀬 稔先生

今年4月1日より本学に着任いたしました。私は、臨床工学技士として21年の臨床経験と、臨床工学技士養成校で24年の教育および研究経験を積んできました。専門分野は臨床工学で、研究テーマを大別すると、①ME機器と病院設備等の安全管理と安全使用に関する研究、②ME機器の警報機能の開発に関する研究、③医療電磁環境の問題点と今後の課題に関する研究になります。これらのテーマは、医療現場でME機器の安全使用のために検討すべき問題点や、今後予想される課題や問題点などを、調査分析や実験的な検証から解明し、使用者、取扱説明書や使用環境などを含めて、システム安全工学や医療安全工学の観点から臨床工学全般にわたる安全問題に重点を置いたものです。本学の学生さんの多くは医療現場での実務者ということもあり、より幅広く実践的で、質の高い研究が行えるものと考えています。共に学び、共に育ちましょう。どうぞよろしくお願いいたします。



和佐 勝史先生

私は長年、大阪大学医学部附属病院で小児外科医として臨床、研究、教育にあたってきました。臨床では短腸症候群、腸管運動障害、炎症性腸疾患など、長期の中心静脈栄養法を必要とする腸管不全症例の手術と栄養管理を担当し、研究では外科代謝栄養や癌細胞増殖をテーマに基礎・臨床研究に従事してきました。また、附属病院栄養サポートチーム(NST)の統括責任者として、チーム医療を臨床の現場で実践してきました。2007年より医学科の学部教育を統括する医学科教育センターに籍を置き、医学科の教育カリキュラムの策定、実施、評価を担当しております。私はこれまでの経験を活かして、本学の重視する医療安全管理や多職種連携領域の教育・研究の発展に寄与していきたいと考えております。

ある在校生の一日

関西電力病院 医療安全管理室副室長
副看護部長 山口 友子さん(9期生)

私は専従の医療安全管理者として勤務して3年目になります。医療事故の防止と医療の質向上という病院の方針に基づいて、医療安全管理室のメンバーとともに活動しています。医療安全管理室のメンバーは、兼任の医師、薬剤師、事務職員で、活動内容はインシデントの情報収集、分析、対策立案や医療安全研修の開催などです。週一回の定例会議に加え、必要があれば適宜集まって現状を共有し対策を検討しています。

このように安全管理室の体制は整っているのですが、複雑な現場で次々発生するインシデント、日々の課題は山積していました。私は、なかなか成果につなげられない自分自身の状況に悶々とした思いで過ごしていました。これまで、さまざまな機会を得て医療安全や看護管理者の役割について学んできましたが、まだ何か足りないと感じていたところ、看護部長から大学院進学を進めていただきました。私は、この現状を解決して組織に貢献するには、一歩踏み出し自分を高めることが必要だと思いました。そして「何を学びたいのか」改めて考えたところ、現状の課題の解決につながる医療安全を学べる本学に進学を決めました。

大学院に進学したいという気持ちを話した時は家族もすぐに賛成してくれました。入学式には長女が保護者として参列してくれました。保護者席に娘がいると思うと、なんだか照れくさいような不思議な感覚と、しっかりやり遂げなければと気持ちが引き締まりました。



入学後は、職場の皆さんや家族の理解と協力を支えられています。職場では、授業に出席できるように勤務の配慮や業務調整に協力していただけるので本当にありがとうございます。また、家庭でも力強い応援があります。授業の日は帰宅時間が遅くなりますが、いつも長女が夕食の準備をして待ってくれています。大学院に進学することで、改めて周りの皆さんに支えられていることを実感している毎日です。

授業では、心理学、人間工学、経営学、倫理、法律など、職種や専門分野が異なる先生方からさまざまな側面から幅広く、深く学ぶことができます。また、同級生の仲間は年齢も職種もさまざまですが、自由な意見交換のなかで毎回新たな発見があります。

大学院では自分自身のテーマに沿って研究に取り組むのですが、私は笠原先生のゼミで研究を進めています。スタートの時点では、やりたいことが漠然としていて言語化も難しかったのですが、笠原先生の熱心なご指導のもと、看護管理者を対象に医療安全に関わるマネジメントの研究に取り組んでいます。

このように貴重な学びの機会をいただき、支えていただいている皆様に恩返しができるように、学び続けていきたいと思います。

畠中 翔太さん(9期生)が大阪腎臓バンクから研究助成を受けることになりました。

滋慶医科大学大学院大学の大学院生・畠中翔太さん（9期生：医療法人紀陽会 田伸北野田病院・臨床工学技士）を中心とする研究チームは公益財団法人大阪腎臓バンクから2020年度腎疾患研究助成を受けることになりました。研究テーマは「Electrical Muscle Stimulation機器が維持透析患者の末梢・全身循環に与える影響の検討」で、本学教員の戸田満秋准教授、椿原美治特任教授の指導のもと遂行されている共同研究になります。



オープンキャンパスのご案内

オープンキャンパスでは、オンライン並びに対面等にて本学の特徴や背景についての説明、カリキュラム、入試制度の案内のはか、講義の体験ができる模擬授業も実施しています。また、修了生によるメッセージもご覧いただけます。入学後の履修科目の選択方法や仕事との両立の仕方など、また、研究テーマについて個別に相談ができます。入学を検討されている方は是非オープンキャンパスにご参加ください。

オープンキャンパスの流れ

① 全体説明

本学の特徴や医療安全管理学分野を学ぶ意義などを説明します。

② 模擬授業

実際の講義を通して、実践的な講義を体感してください。

③ 修了生メッセージ

入学動機や修士論文作成までの流れなどについて修了生が説明します。

④ 個別相談

仕事と学びの両立方法やカリキュラム、学修支援など、個別にご相談に応じます。

個別相談会・授業見学も随時行っております。

お申し込みは本学ホームページ、またはメール、電話でお願いします。

編集後記

瞬く間に世界中に広がったCOVID-19。先の見えない不安に包まれていますが、こんな時こそ、じっくり家族と向き合ったり、自分自身のこともいたわったりする良い機会かもしれません。一方、医療従事者の方々は日に日に増えるコロナウイルスの感染者に対応するため、自身の感染リスクにひるむことなく、極度の緊張下で休みなく働いていらっしゃいます。感謝です。また、皆さまを支えていらっしゃるご家族のご協力にも感謝です。早い、収束・終息を願うばかりです。

修了生の活躍

本学修了生辻恵梨香さん(7期生)と岡耕平准教授が3月6日に開催されたヒューマンインターフェース学会総会で共同研究に対して研究会賞をいただきました。

3月6日に同志社大学東京キャンパスで開催されたヒューマンインターフェース学会総会で、本学の修了生の辻恵梨香さんと指導教員の岡耕平先生が「研究会賞」を受賞されました。

受賞対象となった研究発表は次のものです。

辻恵梨香・岡耕平(2019).
「認知症のある高齢者に対し
介護職員が用いる方便的欺瞞の分類」
信学技報 119(38), 69-72.



本学修了生 菅原厚史さん(7期生)の論文が「日本看護科学会誌」に掲載されました。

本学修了生である菅原厚史さん(7期生)の研究が「日本看護科学会誌」に原著論文として掲載されました。菅原さんは、修了後も研究生として修士研究の分析・検討を継続し、次の知見をまとめました。小児専門病院における医師-看護師間の協働の態度に関連する個人要因について、医師と看護師という職種専門性の違いに着目して検討したところ、協働の態度の向上には、①協働による患者リスク軽減の認識を高め、ファミリーセンタードケアを推進する必要があること、②特に看護師では小児専門病院の看護師としての専門性を發揮できるような早期の介入が必要であることが示されました。

菅原厚史、笠原聰子、石松一真(2020).

「小児専門病院における医師と看護師の協働の態度に関連する個人要因」
日本看護科学会誌 40,47-55.

本学修了生 岸村厚志さん(3期生)の論文が学術誌「作業療法」に掲載されました。

本学修了生である岸村厚志さん(3期生:研究生)の研究論文「介護労働者の腰痛の現況からみた課題と行動分析学を用いた予防教育の有用性」(本学の飛田伊都子教授との共著)が学術誌「作業療法」第39巻第4号(2020年)に掲載されました。本学での修士学位論文「安全な移乗介助技術習得のための教育方法の検証:スライディングボードを用いて」において、介護労働者の職業性腰痛に対する予防対策が重要であるものの、抱上げない移乗介助が習得できる教育方法が確立していないことを指摘しました。今回、介護労働や国内外の腰痛対策の現況に加えて、移乗介助の教育方法として行動分析学を用いた予防教育が重要であることを総説としてまとめました。

岸村厚志・飛田伊都子(2020).

「介護労働者の腰痛の現況からみた課題と行動分析学を用いた予防教育の有用性」
作業療法 39(4), 395-405.

医療安全特別セミナー(2020年12月6日)13時から17時

この度、医療事故調査制度の5年間を振り返って、本学主催で「医療安全特別セミナー」を開催します。本学学長木内淳子先生による学長講演、元最高裁判所判事櫻井龍子先生による基調講演、大阪弁護士会後藤貞人先生による特別講演を行います。

また関西で医療安全の臨床現場で日々ご活躍の先生によるパネル討論を行います。和歌山県立医科大学附属病院水本一弘先生、近畿大学病院辰巳陽一先生、関西医科大学医療安全管理センター宮崎浩彰先生、大阪市立大学医学部附属病院山口(中上)悦子先生です。

COVID-19禍の状況ですので、オンライン開催となります。ご自宅や職場等からアクセス可能ですので、是非ともご参加下さい。



大学事務室から

事務室への連絡はメールアドレス info@ghsj.ac.jp または電話06-6150-1336へお願ひいたします。
(火曜～金曜10時～21時、土曜10時～19時、日祝・月曜休)